

[成果情報名] カキさび果症状の年次別発生状況と有効薬剤の探索

[要約] カキさび果症状の発生は年次変動が大きく、「刀根早生」・「平核無」よりも「富有」で発生が多い。カキさび果症には、スコア水和剤 10 の散布が有効である。

[キーワード] カキ、さび果症、有効薬剤

[担当機関名] 果樹試験場かき・もも研究所 [連絡先] 0736-73-2274

[部 会 名] 果樹 [分 類] 研究

[背景・ねらい]

カキさび果症は、すす病菌の一種である *Aureobasidium pullulans* (de Bary) Arnaud によって引き起こされる病害で、幼果期にへたと果実の間に症状が認められるので、開花期に花弁と萼の間に病原菌が侵入して感染すると考えられている。そこで、年次別の発生状況を調査するとともに、有効薬剤を探索する。

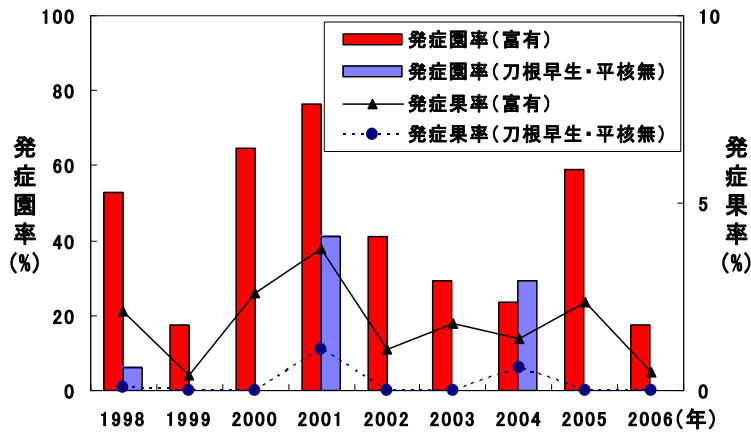
[成果の内容・特徴]

1. さび果症の発生は「刀根早生」・「平核無」、「富有」ともに年次変動が激しい。「刀根早生」や「平核無」は発症が少ないが、「富有」では多い年には8割の園地で発生が認められる。このような多発時には調査園平均で5%、園地によっては10%の果実被害が認められる(第1図)。
2. 2003、2004、2006年の平均発症果率は、スコア水和剤10散布区で無散布区に比べ有意に低く($p < 0.05$)、防除価69.6で防除効果が認められる。ストロビードライフフロアブルは防除効果が認められない(第1表)

[成果の活用点・留意点]

1. カキさび果症の発生は、樹によるばらつきが大きい。
2. スコア水和剤10は、カキのさび果症に対して防除効果があることが明らかになったが、平成18年3月時点ではさび果症に未登録なので試験研究以外使用できない。

[具体的データ]



第1図 カキさび果症の年次変動
 県内のカキ園（「刀根早生」・「平核無」17園、「富有」17園）
 において7月に調査を行い、発症園率と平均の発症果率を示す

第1表 さび果症に対する防除効果

供試薬剤	希釈倍数	¹⁾ 試験年	²⁾ 発症果率(%)	³⁾ 発症度	⁴⁾ 防除価
スコア水和剤10	3,000倍	2003	1.0	0.14	69.6
		2004	2.3	1.19	
		2006	1.4	0.60	
		平均	1.6 a	0.64	
ストロビードライフフロアブル	3,000倍	2003	2.5	0.36	23.8
		2004	6.3	1.76	
		2006	8.5	2.72	
		平均	5.8 ab	1.61	
無散布区	—	2003	4.5	1.64	
		2004	5.7	1.67	
		2006	9.5	3.04	
		平均	6.6 b	2.12	

¹⁾2003年は1区1樹、2反復、4月28日、5月16日、6月4日散布、2004年は1区1樹、3反復、5月11日、6月4日散布、2006年は1区5~8枝、3反復、5月11、22、29日散布で、それぞれの年の平均発症果率と発症度を示した。

²⁾発症果率をarcsin変換後、Tukeyの多重比較を行った結果、表中の同一文字間には有意差(p<0.05)がないことを示す。

³⁾発症度 = (7A+5B+3C+D)/(7×調査果数) × 100

A: 病斑の形成が果面面積の76~100%

B: 病斑の形成が果面面積の51~75%

C: 病斑の形成が果面面積の26~50%

D: 病斑の形成が果面面積の25%以下

E: 病斑がないもの

⁴⁾防除価 = 100 - (散布区発症度/無散布区発症度) × 100

[その他]

研究課題名：カキさび果症の防除技術の開発

予算区分：県単

研究期間：平成10~18年度

研究担当者：森本涼子、南方高志

発表論文等：